

背負梯子の諸形態

中 村 俊 亀 智

まえがき	一九一頁	四、富山のセータ	二二五頁
一、児玉町のショイタ	一九五頁	五、米沢のヤセウマ	二二二頁
二、横越村のヤセウマ	二〇二頁	あとがき	二二九頁
三、大滝村のセイコ	二〇九頁	付、名舟のセナガチなど	二三四頁

まえがき

背負梯子は、薪炭・稲束・ムギ束・俵・樽・その他の荷物を背負うのにつかう、梯子のような形をした在来の運搬具のことである。背負梯子は、かつて全国的につかわれていたことが、すでに確かめられているし、各地域地域でさまざまな形があり、文化の広がりや土地がらを知るための恰好な遺産として、これまで多くの人たちの関心をひいてきた。

現在国文学資料館に収められている旧日本民族学協会附属民族学博物館の資料には、およそ七〇点の背負梯子が含

まれていてそのうち約一〇点が国の重要民俗資料「背負運搬具コレクション 六二点」の一部として指定されている。これらの背負梯子は、いずれも多くの資料のなかから選びすぐられただけあって、形もおもしろく、私たちの興味をひくものばかりである。

そこで、指定された背負梯子のなかから、手もとに材料のそろったもの数点を選んで、背負梯子の形のちがい・おもしろさは、どのような暮らしのなかではぐくまれてきたものなのか、改めてそれらの背負梯子の形のうえでの特徴はどこにあったのかを検討してみようと思う。

私たちの用具論では用具を「特定の用途に供される道具のこと」と考え、用具の形と使い途とが、用具を作り出す・用具を使いこなす技術をな^カだ^チにして、どのように対応するかを現実に即して確め、用具が生みだされる条件、そして、用具を作る人・使う人のかくれた創意や努力をほりこおしてゆこうとする。

調べ、ないし分析にあたっては、とりわけ次の諸点に気をつけた。

一、形を確実におさえておくために、背負梯子全体の寸法や重さを計り、各部分（部材・細部）の寸法や、部分同志の接合がどのような方法でなされているかを調べてみた。

二、その際、この調べでは、とりあえず仮りに、タテにならんでいる柱の役目をする二本の木をタテ木とよび、タテ木を結ぶヨコの木を横木といい、上から順に上の横木・中の横木・下の横木と表すことにした。また、下の横木から下のタテ木の部分をアシと呼びならわした。とくに上の横木がタテ木にかぶさるように、ちょうどIIの字型にかかっている上の横木の型式のことを、鳥居になぞらえて、笠木の型の横木、ないし笠木としてみた。

三、背負梯子には、背負梯子を背負うための緒と、荷を背負梯子にくくりつけるための縄と、種々の役目をする杖とが附属しているが、ここでは仮りにそれらを、おのおの、負い縄・荷かけ縄・荷杖といってみた。負い縄・荷か

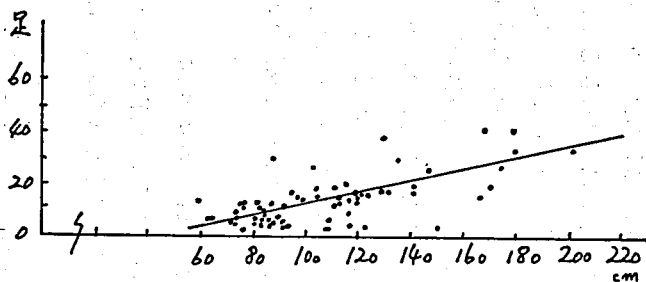
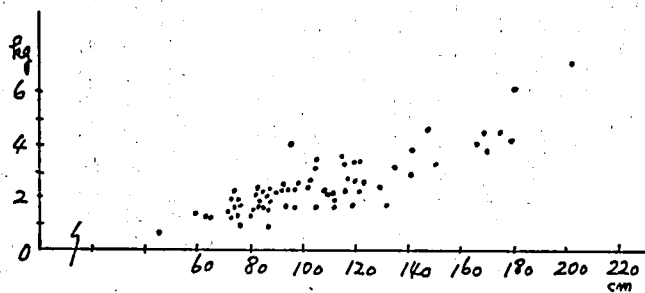
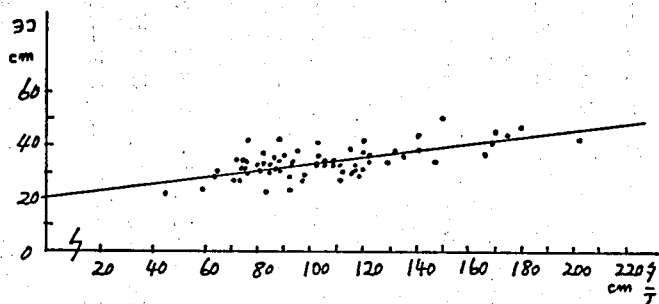
け繩を背負子の本体にどう結びつけ、またどのような荷をかかるとして荷をかかるとして、背負子の形・荷の性質・繩の長さなどによって当然かわってくると思われるので、繩の型式・繩のかけ方・配り方・荷のまとめ方に注してみることにした。

四、背負梯子にはセイの高いもの・低いものがあり、幅の広いものと狭いものがある。自から、荷を背負梯子につけるときのつけ方も、荷をつけた背負梯子を背負うときのしよう、方も場合に依じて異なることが予想できる。そこで、荷をつける仕方・荷をつけてシ、ウ、身のこなしなどについても言葉のうえでは表現しにくかったが、とりあえず注意した。

五、荷をつけた背負梯子を背負って、どのくらいの距離を、どのような場所を、誰が何を運ぶのか。同じような形の背負梯子でも、運ぶ距離と径路の条件によって、荷のつけ加減・使い途もかわってこよう。いったい背負梯子をつかつての荷物の移動は、荷物の流れ全体のなかでどれだけを占めているのか。背負梯子をつかつての労働は、生産の動きのなかで、あるいは暮らしの流れのなかで、どのような重みをもっていたのだろうか。運搬具のこれまでの調べは、ともすれば、運搬具自体の調べにおわる傾向におちいり、たとえば、運搬具の形を比べあわせたりするだけの研究に終りがちだったが、ここではそれ以上まで掘りさげることにした。

六、背負梯子は現在ではほとんどつかわないか、昔ほど盛んにつかわなくなってしまったが、どうしてつかわなくなったのか。何に替えられていったか、昔、背負梯子を盛んにつかっていたのはどうしてなのか。背負梯子をつかわなくなったのは、どのような暮らしの移りゆきのきざしなのか。ここではそうした点についても目をむけてみた。

ここでとりあげた背負梯子は、いずれも戦前にあつめられたものばかりである。必ずしも私たちの注文にあった当時の記録がのこされているとは限らない。そこで一ツ一ツの背負梯子について所用地を確かめ、所用地のわからない



第一図 背負梯子のタテ、ヨコ、その他

ものは近くをたずね、実際に使ったことのある方々からお話をきき、聞き書きをつくり、この小文をまとめた。背負梯子についての問題は、もちろん小文でつくるものでもないし、私の聞き書きまた決して充分とは思えない。そこで聞きちがい・思いちがいがあれば改めるのはもとよりだし、またできれば、さらにいっそう詳しい記録を地元の方々でお出しになることをお願いしたいと思う。

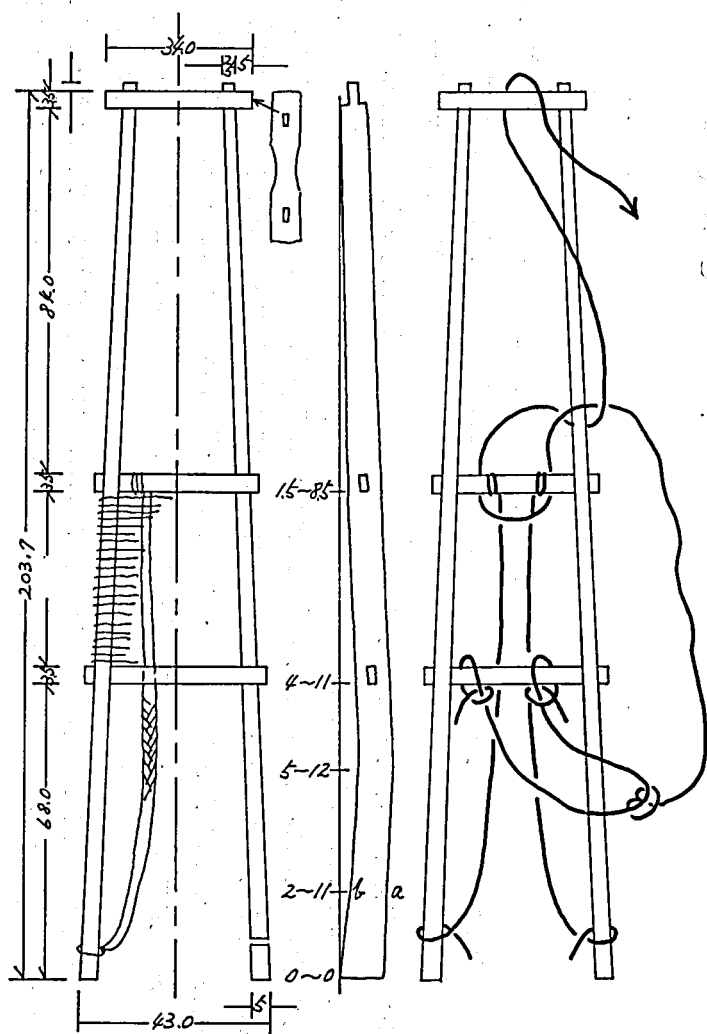
小文をまとめるために懇切なお教えをいただいた埼玉県児玉町教育委員会・児玉町公民館、同大滝村教育委員会、富山県富山県史編纂室、富山県高岡市立美術館・同市立博物館・同市西部公民館、財団法人二上山郷土博物館、石川県立郷土資料館、新潟県横越村公民館、山形県米沢市教育委員会、同市山上地区公民館、山梨県甲府市藤村記念館・同大月市教育委員会、神奈川県横須賀市立博物館の諸先生、ことに、鈴木精華、吉川豊、千島敬次郎、漆間元三、神保成伍、長谷川洋、山本源太郎、松村外喜、小林忠雄、青木一男、増淵一平、泉沢宏一、沖田良夫、金子正広、高橋忠雄、伊藤三之助、小沢秀之、田辺悟諸先生、そして、加藤強平、皆川甚吉、小林茂、大塚和義、小野重朗諸先生に心からお礼を申上げたいと思う。

お教えを拝いたことがらは、論文における引用とまったく同じものと考え、とりあえず私の聞き書きから引用文をつくり、註記によって拠りどころを明らかにさせていただいた。

一、児玉町のシヨイタ

a つくり

背負梯子は、寸法の点からごくおおずかみにみて、人の背たけをこえるような大型の背負梯子と、反対に五〇ない



第二図 埼玉県児玉町のシヨイタ

し六〇センチの長さで、わずかに人の背中くらいの大きさの小さな背負梯子と、その中間にあるいわゆる中型の大きさの梯子との型三ツにわけることができる。

ところがこの三ツの区わけは、たんに大きさのうえのことだけではなく、形のうえでも、それぞれ特徴がみられよう。大型の背負梯子は、(一)大きさの点で大きいばかりでなく、(二)おしなべてアシが長く、(三)中の棧から上の長さもかなり長く、(四)笠木をのせた型のものが多く、(五)全体として木割が太く、(六)重さもそれ相当地に重いことなどが指摘できる。なお、背負梯子の長さ^①とヨコ(幅)とのあいだには、ほぼ一意的な関係が、また、大きさと重さとのあいだには、おおまかながら特定の関係がなりたつことが確かめられる(図一・a b c)。

埼玉県児玉郡児玉町金屋のショイタは、背負梯子の三ツの型のうちの大型、しかも大型のうちでももっとも大きな梯子のなかに含まれる^②。全体の長さは二〇三・七センチで、ヨコも下の幅四三センチ、タテはヨコの約五倍で、全体として非常に細長い形をしていることがわかる。下の棧から下のアシの長さは六八センチで、全体の長さのおよそ三分の一、中の棧から上の長さも八四センチで全体の長さの四割の値をもっている。

それなら、このような大きな背負梯子にはどのようなつくりがなされているのだろうか。

タテ木は長さ二〇三・七センチ余で幅二五ないし四〇・奥行六五ないし一〇〇ミリ、下が大きく上が小さいスギの木がつかわれている。タテ木の断面は頭で二五×六五、下で四〇×一〇〇なので、幅一に対し奥行が二・五倍の細長い矩形で、タテ木の感じは厚い貫^{ぬき}といった感じである。タテ木は一応鉋^{かんな}がけしてあるけれども、ところどころ凸凹がみられ、素朴な仕上げと思え、またタテ木を横からみると外側に反っているのがわかる。反り具合は下から二〇センチのところあたりから急に強くなっている、自然の木の反りを利用したらしいことが考えられる。こうしたタテ木の形は中型・小型の背負梯子にくらべ、いや、他の大型の背負梯子と比べあわせても、非常に特徴的である。タテ木

の頂には、幅一〇・厚さ二五・高さ五〇ミリのホゾが切られていて、笠木に通しホゾで接合されている。

笠木には長さ三四センチ・幅六五・厚さ三五ミリの太いスギの木がつかわれている。笠木のまんなかには、前後から切りこみがあり、上からみると短いキネのような形をしていて、ここに荷かけ縄がかかるよう工夫されている。

中の棧と下の棧は幅・厚さとも三五ミリの角材で、両端にはそれぞれ幅三〇・厚さ一五ミリのホゾがあり、タテ木に通しホゾで接合されている。なお、ホゾのさきはタテ木の面より二〇ミリほどつきでている。

負い縄は左右二ツで、ワラの三ツ組で、肩にあたる部分の六四センチが幅三五ミリの平組、そのさきが丸組に編んであり漸次細くなっている。負い縄は上のはじを中の棧に、下のはじをタテ木に穿たれた小穴に結んでとめてある。

荷かけ縄は上下二ツの部分からなりたっている。まず、下のほうは両端を下の棧に結びつけ、U字型にとりつけられていて、もう一ツは、そのU字型の部分のまんなかから出発し、中の棧の負い縄のあいだを通り、笠木のまんなかのくぼみにまわしている。下の縄は長さ六〇センチ・太さ二〇ミリ、上の縄は約三メートルで、上の縄の太さは下の縄とほぼ同じである。これら縄のかけ方は、すぐあとでみよう。

児玉町ではショイタは昔は目見当で「自分のからだにあわせて作ることが多かった」⁽²⁾。「ショイタの幅は、肩にタテの木があたると背負いずらいものなので、肩幅よりもちよっと大きめにし（だいたい五センチほど大きめにし）、タケは長いショイタで人のセイの約一・五倍ぐらいにした」⁽²⁾。昔の一五七・五センチの男の人で、肩から上が六〇センチ、全体で一八〇センチぐらいの勘定だという。「ほどよい太さのスギの丸太をきつてきて、タテ二ツに割り、余分な残りの細いところで棧などとり、ノミでホゾ穴をあげ、腰から肩のあいさにセナワがくるように棧をとりつける」。ここでは負い縄をセオイナワというが、「セオイナワは三ツ編みで、ワラにボロ切れなどいれて強くした」。負い縄のとりつけ方には、タテ木の下に穴をあげ、そこにはじを通して結んでとめる方式と、タテ木の下にレの字型の切り

こみをいれ、そこには、いを結んでとめる方式との二ツの型があるという。

児玉では足の長いショイタのほかに足の短いセイの低いショイタもつかわれていた。この「短いショイタはボヤ作りなど薪を伐つてくるのにつかつた」。「足の長いショイタと短いショイタを比べてみると、比較的足の長いショイタは浅い山や山辺の畑などで使用し、足の短いショイタは深い山のなかで使用できた。足の短いショイタは休むとき山際に足をつけて休むか、岩や石にアシをつけて休んだ。しかし、足の長いショイタはそのまますこし腰を下げるだけでアシが地上についてしまうので楽に休憩できる。もつとも、急な坂の登りおりにはアシの長いショイタは不向きだ。アシの長いショイタはすこしかがめば、すぐ肩紐が肩のところにくるが、アシの短いショイタは背負うのに苦勞する⁽²⁾」という。

b せ お う

児玉ではショイタは多方面に利用されていた。「ショイタは交通不便な山林の山仕事・農業に使用されていた。粗朶を家に運ぶとき、桑を運ぶとき、冬、屋根を修理する茅を運ぶとき、冬、山で焼いた木炭を牛馬のくるところまでおろすとき、夏土用、草のさかんに出るとき、山掃除をかねて、畑の堆肥にする草を山から刈ってくるとき、そして、畑で収穫したソバ・アワ・ヒエ・ムギなどを取りいれるときなどにショイタがつかわれた⁽²⁾」。

ショイタに荷をつけるときには、「太い縄を用意しておく。縄の両端^{つようはじ}を下の棧とタテ木のアシにくくりつけ、U字型に張りわたし、別に細い縄を用意しておいて、細い縄を太い縄のまんなかから上の棧のまんなかの切りこみのあるところへかけておく」。そして(1)ショイタを地面に平らにねかせておいて、(2)荷をショイタの上にのせ、(3)前記の荷かけ縄の細いほうの縄を締めて、(4)細い縄のはじを太い縄に縛りつけてとめる。

荷は下の棧から笠木までのあいだにのるように、つけるようにするという。「下よりも首の上に荷がくるようにつ

けるほうが楽である⁽²⁾。

ショイタを背負うには、(1)荷をつけてねかしておいたショイタの笠木を両手でもち、(2)笠木を両手でもっておこし、(3)たとえば、ショイタに向いあい、左手をのばしてショイタをやや斜めに支え、(4)右手で負い縄もち、肩をいれやすいようにしておいて、(5)右足を斜に踏み出し、左足を軸にしてからだの向きをかえ、(6)肩をショイタにつけ、肩で重心を支え、(7)右手を負い縄におし、(8)同じように左手を負い縄におし、(9)やや前に重心がかかるようにしてからだをまげて背負う。そうすると「なれば相当な量の荷物でも楽に運べる⁽²⁾」という。「歩くときには腰にはずみをつけて、リズムをとって歩く」。おろすときには、ややかがんでショイタの足を地面におろし、つけるときとは逆の動きで、静かにショイタをねかせて荷をおろすのだという⁽²⁾。

ショイタの下には、昔は女の人なら長着^{ながぎ}の野良着で尻っぱしよい・お腰、男の人はヒザまでのハンテンにマタヒキ(モモヒキ)、足^{あし}こしらえは素足に交叉型のすげ緒のワラ草履をはいていた。

c は こ ぶ

児玉のショイタには、粗朶なら直径五〇センチの束を五束、炭なら今の四角な俵で八俵、ムギなら直径五〇センチぐらいの束五束(長さは九九センチか六六センチ)、「ムギの場合には下の棧から上の棧までに三束つけ、その上に二束のせた」。草はクサカリカゴ一杯分。ただし「短い草はクサカリ・カゴにいれて運び、長い草はカゴにはいれずらいので、ショイタにつけて運んだ」。ボヤなら三〇キロというところだった⁽²⁾。

いまムギの収穫について運び出しの過程をおってみよう。

六月中頃、刈りとったムギを(1)サクごとにまとめてしぼり、一束にまとめる。(2)それをアゼミチや、刈りとったあとの畑などを通して、大八車のはいる道のところまで運び出す。「その頃はツユのあけぎわで、よく雨に降られる。

秩父の御荷鉾にかかる雨雲は山賊雨といった⁽²⁾。「アゼミチは昔は人が一人や々と通れるくらいの狭いミチだった⁽²⁾」。

「家中でお弁当をもって畑へゆき、皆で刈り、ひとしきり刈りおわると、男の人が束ね、束ねたはなから他の人たちがショイタや手カツギで二束・四束とかつぎ出す⁽²⁾」。村道から畑のきわまでは車がやっとはいれるくらいの道がついてる。この道を馬^{うま}入りという。(3)馬入りまで出したムギ束を車に積み、(4)「引き手一人、押し手三人で村道を家まで運んでくる⁽²⁾」。束はムギの出来のよし悪しで長いのは二カ所しり、短いのは一カ所しり、また、家に近い遠いによつて運び方もちがつてくるという。(4)家まで運んだムギ束は、庭へ積み、ちよつと干し、(5)足踏みにかけてこぎ、クルリボーで稗と実とをわけ、唐箕で皮とシイナを吹きわけ、五日から一週間ほど乾し、俵にいれて貯える。クラのない家では入口の入りぎわの土間などに積んでおいた⁽²⁾。

畑から家までの有様を仮りに模式的に示していただくとはほ次のようになる。畑一枚一枚は今では耕地整理がなされているが、昔はいろいろな形で、一枚はおよそ二アールから三アールくらいで、その幾群かにアゼが廻してある。畑から馬入りまでは約一〇〇メートル、村道までの馬入りの長さは約三〇ないし五〇メートル、馬入りから家まではかなりの距離がある。この畑から馬入りまでがショイタで運ぶ過程である。「やはりショイタで運ぶ方が楽だった⁽²⁾」で、どこの家でも、二ツや三ツはショイタが用意してあった⁽²⁾。

「ショイタがつかわれなくなったのは昭和三〇年頃である」。その最大の理由は「一輪車はいって、それが畑にも山にもつかわれるようになり、農道整理で耕耘機が畑の奥まではいれるようになり、それに燃料にガスや石油がつかわれるようになり、山林の仕事もなくなってしまった⁽²⁾」からだという。ここではショイタがこのように最近までつかわれていたことがわかる。

金屋を含む児玉町は現在二四の大字を含み人口一万九千で埼玉県北部の交通商業の一中心地となっている。しか

し、昭和三七年の統計によれば全世帯の五二%が農業に従い、耕地の四五%が普通畑、三三%が水田、二〇%が桑園で、田の六八%は耕地改良によって二毛作田となっている⁽³⁾。また町の西半分は陣見山や、さらに千メートルの城峰山へとつづいている。武蔵国郡村誌によれば、金屋村は人口六五一で、そのうち農業を専門にする人二九三、鋳物にたずさわるもの三三。「女の人は農桑を業とする」、土地は「赤根川を帯び、平坦にして車馬に便なり」「地味は黄黒色で質は中程度、稲梁に宜しく桑茶に適せり、水利不便時々旱に苦しむ」とあり、大麦四三三石、小麦二二〇石、大・小豆四八石、横浜へ輸出する蚕印紙二〇〇万枚、繭一四二石三斗、生糸三六貫六五匁、生絹一一〇疋、生太練四〇〇疋、農具鍋釜類五六〇駄をあげている⁽⁴⁾。

児玉町シヨイタ運搬がさかんに行われた背景には、このような商品生産のたかまり、そしてそれに、山と平野とをあわせ含む立地条件の複雑さと生活の多様さがあったのだと思われる。

註

(1) 文部省史料館民族資料図版第三卷一五三頁から一八二頁。吉川豊先生によれば児玉のシヨイタのなかでもとりわけ大きいという。

(2) 鈴木精華先生、吉川豊先生による。吉川先生からは、

シヨイコの問題点についての長文のお手紙をいただいた。

そのお手紙によって、私ははじめて、シヨイタの複雑な働きを知らされた。

(3) 児玉町勢要覧(昭和三七年児玉町役場刊)による。

(4) 武蔵国郡村誌卷之三(埼玉県立図書館昭和二九年刊) 一二七から三〇頁。

二、横村越のヤセウマ

a つくり

新潟県の阿賀野川下流域では、やはり(一)笠木の型式で、(二)幅のひろい、(三)アシの長い、(四)タテ木の断面が矩形で、

図大きな点では大型の、ちょうど児玉のショイタをひとまわり小さくしたような形の背負梯子がつかわれている。これをこの地帯ではヤセウマとよんでいる。ヤセウマの呼称は綜合日本民俗語彙によれば、甲信越から東北地方にかけて行われているという。

それならヤセウマは関東のショイタとどちらがうのだろうか。

重民の新潟県中蒲原郡横越村のヤセウマは、もと財団法人北方文化博物館から旧民博へおくられたものだという。作りはことのほか丁寧で、たぶん詠えてこしらえさせたのだろう、まだ新品のように思われる。

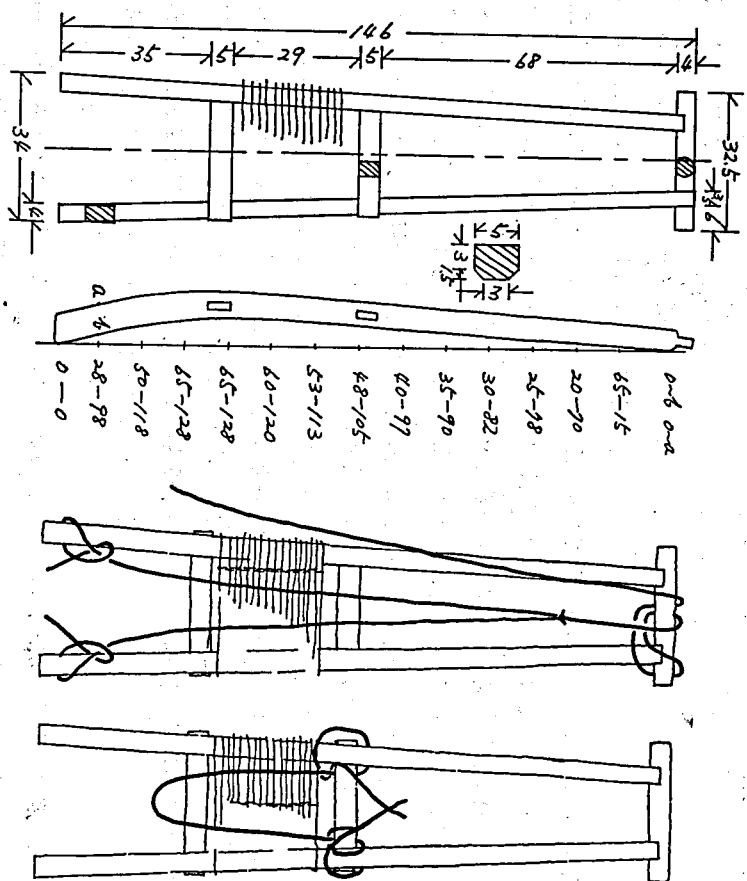
この横越のヤセウマは全体の長さは一四六センチ、下の幅は三四センチで、計算してみると、ヨコタテの比は一對四・三、アシの長さは全体の長さの二三%、中の棧から笠木までの長さは全体の長さの半分という数字が得られる。重さは四・五六キロで、たててみると笠木がちょうど私たちの首かアゴのあたりにくることがわかる。

タテ木は長さ一四六センチ、幅は上端で三五ミリ、下端で四〇ミリでほとんどかわらず、奥行きは下端で七〇ミリ、上端で五〇ミリで断面はタテヨコの比が一對一・五ないし一對二の細長い矩形をしている。タテ木はこのヤセウマでも外側に反っていて、計ってみると下から一五センチあたりから急激に反りの具合をましていることが確かめられる。こうしたタテ木の形も、児玉のショイタと同じように、ヤセウマのきわだった特徴といえることができる。

タテ木の外側の縁は幅一〇ミリ・高さ一五ミリほどに、きれいに面がとってある。こうした仕上げのゆきとどきの具合はこの地方の一般の背負梯子ではどうなのだろうか。

タテ木の頭には幅三五・厚さ一五ミリのホゾがきってあり、笠木に通しホゾで接合されている。このほかま、い、笠木をうけるための特別な切りこみがみられる。

笠木には長さ三二・五センチで、直径四〇ミリの丸木まきぎがつかわれている。笠木の両端、タテ木から外側の部分の長



第三圖 新潟県横越村のヤセウマ

さは六センチで、それほど目立たない。

中の棧と下の棧には幅五〇ミリ・厚さ三五ミリのものがつかわれていて、みるからに丈夫そうである。この二つの棧はタテ木に厚さ一五ミリの通しホゾで接合されている。中の棧と下の棧とのあいだには太さ三ミリのワラの縄が巻いてある。そして、このヤセウマでは、その縄をタテの細い縄でかがってとめている。

負い縄は太さ二五ミリの三ツ丸組のワラ縄で、両端は中の棧とタテ木とに結びつけ、U字型にとりつけられている。その輪のところに首・肩をいれて背負うのである。U字型の部分は長さ一一〇センチほどである。

おもしろいのは荷かけ縄の型式で、荷かけ縄には太さ八ミリの三ツ丸組の縄を左右二本用意しておき、二本の端をタテ木のアシに結びつけ、そして笠木へとまわすのだが、途中でこの二本を一ツにまとめ（ここまでの長さは三五〇である）、一ツにまとめたものを笠木のまんなかへかけ、さらに笠木の両端へかけている。この梯子では、なおこのほかに別に同じくらいの太さの縄がもう一本用意されている。

横越のヤセウマは一般のヤセウマとどの程度のへただりがあるのだろうか、その点を確かめてみるために、横越村公民館所蔵のヤセウマをあげてみよう。このヤセウマは横越村横越の市村さんが寄贈されたもので正真正銘最近までつかっていたものである。このほうは全体の長さが一三九センチ、ヨコ幅は三二センチで、笠木には太さ五〇ミリのものがつかわれ、中の棧・下の棧にも厚さ五ミリの木が渡してある。棧とタテ木とはいずれも通しホゾの手法で接合されている。重民のヤセウマと異って、アシの長さは四一センチあり、それぶん中の棧から上の長さが短縮されているように思われる。また、笠木へのタテ木のホゾが折れてしまったらしく、タテ木の頭に長さ一三センチの溝をタテにはり、そこに二〇センチほどの長さの木を埋めこんでホゾの代用をさせている。笠木のまんなかには相当に深い縄ずれのあとがみられる。

b せ お う

ヤセウマはお米やムギの収穫、それに菜種や野菜かずき、カヤ運びなどにつかわれた。ここではカヤは焚き物として、また家々の周囲を囲う風除けの材料としてつかわれた。

ヤセウマに荷をつけるには、(1)ヤセウマを地面に平らにねかせ、(2)荷をヤセウマの上にのせ、(3)荷かけ縄をかけるが、荷かけ縄は次のようにしてかけてゆく。この方式はこの地方では一定したものである。説明の都合上、タテ木の向って左の下の方のあたりを点 h としよう。同じように右の下の方のあたりを点 g としよう。 h と g とを結ぶ弧の中心点を i とし、笠木のまんなかを a' としておこう。まず荷かけ縄を向って左のタテ木のアシのつけね h に結びつける。(4)結びつけた縄を右側のタテ木のアシのつけねの点 g にもってゆき、Uの字型の輪をつくる。縄はひとまず i 点で結んで固めておく。(5)タテ木のアシから笠木のまんなかへ(g から a' へ)縄をまわし荷をおさえ、(6)笠木の中央からさきほどつくった輪に縄をまわし(a' から i に縄をかけ)(7)末端は右側のタテ木の点 g に結んでとめる。荷かけ縄は、 $h \cdot g \cdot i \cdot a' \cdot g$ の各点を経て荷にかけられることになる。

荷は「できるだけヤセウマの上の方、中の棧から上に中心がくるようにつけるとよい」という⁽¹⁾。

こうして荷をつけたヤセウマを背負うには、たとえば、(1)右手で笠木をもち、(2)地面にねかせておいたヤセウマをおこし、(3)からだの向きをかえてすこしがんで背中をヤセウマにむけ、(4)肩をヤセウマにつけ、(5)負い縄を首から肩にかけ、(6)ヤセウマのタテ木の $h \cdot g$ 点に結びつけてあつた左右のコシヒモを負い縄にとおし、(7)胸のまえあたりで結び、(8)からだを斜めに前におって歩きだす。

昔は「ヤセウマの下にゴウギをあて、上に山着物、下はモモヒキで、地下たびか草鞋をつけた⁽¹⁾」。

c は こ ぶ

横越ではヤセウマはどのような重要さをもっていたのだろうか、この点を明らかにするために、主要生産物のおこめの取りいれについてみよう。

稲刈りがおわると、(1)刈りとった稲は根本^{ねもと}をしばって小さく束ね、(2)小さな束一二把をいっしょにいてさらに大きな束をつくる。(3)刈りとった稲はナトリダテといって、ひとまず田に一行にならべ一月ほどおく。(4)おいだ稲束を田のきわに設けられたハサ場まで運び、(5)ハサにかけ、天気の良いときで一週間から一〇日、秋口の「日の薄いときなら二週間」も干しておく。(6)そして家まで運び、(7)手廻しや足踏みで実をおとし、土臼^{ドウス}で皮をむき、カワとミを選びわけ、唐箕でカラをとばし、(8)冬期になってからついて白米にした⁽¹⁾。

この過程で、ヤセウマは「ハサまで運ぶときとハサイレのときとの二度につかわれた」⁽¹⁾ (4)と(6)の二度につかわれた。

現在ではだいぶんきられてしまったが、この地帯では、田のきわにほぼ一メートルごとにタモの木が植えてあり、刈りいれの季節になると、この木に横木をわたし、八段から一〇段、稲束をかけるハサがつくられた。ハサのためのタモの木の列は、昔のこの地方の景観になくはならないものだった。「ハサの稲が乾かないと次の稲がかけられないので、稲刈りもおくれる。ハサの稲は早稲・中手・奥手で三度かけえられた」⁽¹⁾。ハサイレでは、稲束が乾いているのでヤセウマに八束から一〇束づつつけ、刈りあげのときには五・六束だった⁽¹⁾。「田の広さは、おおよそ、五ないし七アールで、土^{つち}あぜなので、それほどたくさん運べない。一〇アールの稲を運びおわるのに、二人から三人で半日以上もかかった⁽¹⁾」といわれている。

模式的に示していただくと、田のナトリからハサまでは二〇〇から五〇〇メートル、ハサから車の通れる大通りまでは二〇〇メートルぐらいあるという。この二ツの区間を、それぞれヤセウマで、休まずいっしょに運んだ、距離の長

いところでは荷をすくなくして運ぶようにした。田から家までは一キロから一・五キロもあった。

街道にそってつくられた聚落のうしろには広い田んぼが広がっている。とくに積雪の季節、ここをおとずれると、その広さが目に焼きつく。

大通りまで出しておいた稲束は、牛車や荷車や手引き車(大八)で七〇から八〇束いっしょにつけ、家まで運んだ。

「どの家でも働き手の数にあわせて三ツや四ツ、ヤセウマが用意してあった⁽¹⁾」。

ヤセウマがつかわれなくなったのは戦後のことであった。まず、耕地整理によって農道がよくなり、車が奥まではいれるようになった。車が奥まではいればヤセウマでのハサイルはもう必要なくなった⁽²⁾。そして「昭和四四年頃には自動脱穀機コンバインが導入され、刈りいれた稲は田んぼで脱穀されるようになり、刈りいれ作業は極度に短かくなった⁽¹⁾」。これがヤセウマを稲作から完全に不要なものにした。コンバインの導入は早稲だけの農業を可能にし、労働を時間的に短縮した。「昔は星の出ているあいだに田へ出、朝めし前二時間働き、七時には家で朝めしをすませ、また田んぼへ出た⁽¹⁾」。

昭和四三年の統計その他によれば、横越村の就業入口のうち六七%が農業にしたがい、耕地の七五%が水田で、農産物粗生産額の六五%はコメによるものだった。昭和二三年から七年間、大規模な水田排水事業がすすめられ、それまで全水田の七〇%を占めていた腰までぬかるような湿田が乾田化され、農地改革ともあいまってこの地域の農業は新しい方向をめざすようになっていった⁽²⁾。

このようにみてみると、私たちがヤセウマの本当の姿を知るためには、ヤセウマ労働と雪国の単作米作地帯の農業の歩みとを重ねあわせてみなければならないことになろう。

註

(1) 増淵一平、青木一男、泉沢宏一諸先生による。とくに

増淵先生からは民俗の概況についてお教をうけた。横越は小林存先生の出身地で小学校には先生の歌碑がたてられている。小林先生の横越村誌(昭和二十七年横越公民館刊)、曾我広見先生の横越村の民俗(昭和四八年自費出

版)を参照させていただいた。

(2) 横越村村勢要覧(昭和四三年横越村役場刊)、わたしたちの横越村(昭和四九年横越村教育振興会郷土資料部会編)による。

三、大滝村のセイコ

a つくり

それなら平野の背負梯子に対して山あいの地帯ではどのような背負梯子がつかわれていたのだろうか。

ここでは後出の富山のセータや米沢のヤセウマとのかねあいにおいて、前記の児玉町から直線にして三・五キロほど西にはいった関東山系の秩父郡大滝村神庭^{かみだ}のセイコについてみておこう。大滝村のセイコには、笠木型と、普通の梯子のように笠木のない型とがあるが、ここでは後者をとりあげてみよう。

いま、神庭の加藤さんのセイコについてみると、全体の長さは一〇七・五センチ、中は柱の下端外面^{もとぞう}から外面まで三〇センチで、重さは二・三キロ、(一)長さは児玉のショイタの半分で、児玉のショイタではタテ木は肩の中よりすこし出るくらいだったが、(二)大滝のセイコでは背中にすっきりおさまるくらいの幅、(三)ヨコタテの比率もおよそ一対三で、(四)上下の開きも下幅の六分の一で、くすくなく、ほとんど短冊型をしていることがわかる。このあたりでは、このくらいの形・大きさのものが普通に行われているという。⁽¹⁾また、(五)アシの長さは一八センチで全長の一七%にあたり、上の棧から上のタテ木の長さも一七・五センチほどである。背負ってみると、上の棧から上の部分がちょうど

頭の上に出ることになる。このような形の背負梯子は、寸法に多小のちがいがみられるが、秩父奥武蔵の山間地帯では、どこでもみられるような気がする。

セイコを形作る部材も、いたって直線的で、タテ木にも棧にも幅三五ミリのスギやクリの角材がつかわれている。タテ木は長さ一〇七・五センチ「ヒノキの下枝などもよくつかう」という。⁽¹⁾上の棧と下の棧とは厚さ二〇ミリのクリの木で、いずれもタテ木に通しホゾで接合されている。中の棧は、ここでも、含みホゾである。上の棧と下の棧の端はそれぞれタテ木の外に五〇ミリほどつきだしている。ここでは棧のことをコと呼んでいる。シタコ・ナカコ・ウエコなどという。

負い繩は長さ七四センチで、肩にあたる長さ三七センチのところが幅五〇ミリほどに布切れなどいれて組み編みされている。負い繩のことをカタオ・セイオなどといっている。負い繩は「休むときなど、ぐはずせるよう、下の方を予め輪にしておき、タテ木にはめればよいようにしておいた」⁽¹⁾。

背中にあたる中の棧と下の棧とのあいだには太さ七ミリのワラ繩が巻いてある。この繩は「ミョウガの葉を干して縛うと白くてきれいで、結びよい」という。この地方のイワスゲなども用いられている。

荷かけ繩は「たいいていシユロ繩で二ヒロぐらいは用意しておく」。⁽¹⁾荷かけ繩は左右二本で下のはじはタテ木のアシと下の棧とにからめて結びつけておく。

「セイコをしようには荷杖を必ずづかった。荷杖はニンボーにいい、ニンボーは自分のタケにあわせて、セイコを背負って荷杖をついて、ややヒザをまげて立てるよう（これがセイタを背負ったときの休む姿勢）加減しておいた」。⁽¹⁾「荷杖をつかいつけると、積み石や石垣によりかかって、積み石や石垣にセイコのアシをもたせかけて休むより、荷杖をセイコにかって休む姿勢のほうが、かえって楽だ」という。⁽¹⁾

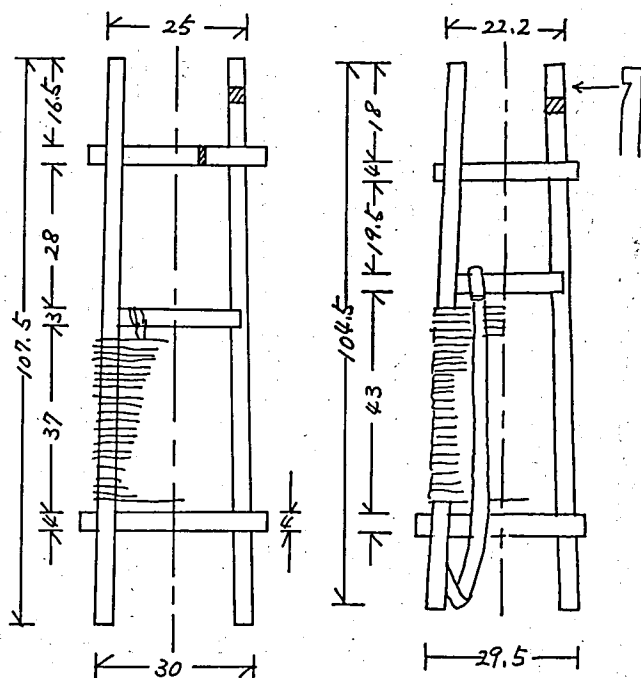
セイコは「昔は、めいめい自分でこしらえたもので、直径七五ミリぐらいのスキの丸太をタテ二ツに割り、ホゾ穴をあけ、それに棧を通した。棧もまるいままだったし、柱も荒くけずったままで、木のまるみが残されていた。大工にこしらえさせたものは、タテの木もきちんと削ってあったし、ホゾもきれいにいれてあった」⁽¹⁾。このお話から昔のセイコのおおかたの形を思いうかべることができよう。また「アシの短かい長い荷杖をつかいつけた人なら、どちらかというとき長いほうがしよいよく(?)、アシの長さ加減によってジョイよいセイコとわるいセイコがある」⁽¹⁾。

b せ お う

神庭ではセイコは薪炭を背負い出すのに使われていた。仮りに炭をつけて背負うとすれば、(1)セイコを地面に平らにねかせておき、(2)あとでおこしいよう、頭のところに荷杖をねかせてかっ、おく。(3)俵は下の棧から上の棧までへ三俵つけ、(4)二本用意してあった荷かけ繩のはじを左のタテ木のアシに結びつけ、(5)荷かけ繩を俵のうえをもって、(6)左のタテ木の頭のところにひとまず結び、(7)右側の荷かけ繩も同じように俵にかけてタテ木の頭に結び、(8)三俵の俵のうえに、上荷としてさらに一俵、力の強い人なら二俵のせ、(9)荷かけ繩をそれぞれ上荷にまわし、(10)上荷を締めた繩のはじを上の棧に結んでとめる。

「一ツ上荷をつけたほうが楽だ」⁽¹⁾。「危いところでは、なるべく重心を下へもってくるようにして背負う。荷をセイタの下の方にもりあげるような形で背負うとケツニ(尻ッ荷)といつて、とても苦しい」⁽¹⁾。

荷をつけたセイコを背負うには、(1)地面にねかせてあったセイコを、上の棧に手をかけておこし、(2)荷杖を上棧の棧にかけてセイコを斜めにたてかけ、(3)上荷をつけ、(4)セイコに向きあい、たとえば左手で中の棧を支え、(5)右手で荷杖をすはし、(6)からだをまわして、からだの向きをかえ、セイコに背中あわせになり、(7)セイコに背中をつけ、セイコが短いのでヒザをまげて胸につけ、うすぐまるような姿勢で、(8)負い繩に右肩、左肩をいれ(このとき負い繩の下



第四図 埼玉県大滝村神庭のセイコ

が輪になってタテ木からはずせるようになっていると、予めはずしておいて負い繩を肩にかけてから下の輪をタテ木のフシにはめればよいのでかけやすい)、(9)ヒザをのばし、かがむような姿勢で立ちあがる。

昔、セイコを背負うとき着ていたのは、男の人なら腰のあたりまでくる厚いハンテン、その下はメリヤスの肌着、それにモモヒキ、足ごしらえはワラジ・地下足袋ばき、女の人なら長着でワラ草履ばきだった。(1)

c は こ ぶ

ここでは薪は自家用でモシキ（然し木）といった。太い薪はそのまま囲炉裏（ヒジロ）にくべたし、細いボヤ木はあわせて太いた。太い木は長さ九九センチにきり、そのままセイコにつけ、細い木は長さ九九センチにきり、直径二〇センチから三〇センチに縄で束ね、セイコにつけて運んだ。

運んだ薪は木小屋や家の軒下に何年分も積みっぱなしにしてきれいに干しておいた。「木小屋がからになるとあの家は貧乏だといわれるから、どこの家でもたえず新しい薪を次から次へと補充して積んでおいた」。(1)

いっぽう炭焼は、むかしは神庭ではどこの家でもやっていた。炭焼は一月からお蚕の忙しくなる四月までの大切な冬仕事だった。たとえ炭を焼かない人でも、伐り子^{きこ}といって、原木の伐採にでていたし、モトジメ（元締）といって、焼き子をおおせいつかい、山を買い、カマを築いておいて、焼分^{やきぶ}一俵いくらで、焼き子に炭を焼かせ、家で百姓をやらぬ何人かの人たちは年間通して炭焼きを専門にやっていたという。(1)

炭焼に伐採した「ナラ・クヌギ・クルミ・ソロなどの木は長いまま、タテにして背負い、手でころがしたり、かついだりして窯場までもってくる」。(1)。「炭窯^{すすがね}は木の寄せやすいところ（伐採して運びやすいところ）、水の便のよいところ、粘土の近くにあるところ、日当りのよい作業のしやすいところに築き、焼き数によって二十俵ガマとか三十俵ガマとかいい」、幅一・五から二メートル・奥行き二メートルから二六メートルで、歩測でタテヨコを計り、土を平ら

にし、丸石を両側から持ちおくりで積んでゆき、頂に三角な石をのせ、手で粘土をこね石のあいだには、たいて、詰めこみ、外側から五〇センチぐらいの厚さに土を塗り、内側にも石がみえなくなるくらい土を塗り、四角に石を積んで煙出しをつける。原本は予め無駄のないように窯につめやすいように切っておき、焼きあがったところをカギでかきだし、マタギでおこす。⁽¹⁾「一度築いたカマは何年でもつかえた。一代つかえた」。⁽¹⁾

焼いた炭は俵につめ、家まで運び、屋根下などに積んでおいた。「ヨオニといって、仕事がおわって家に帰るとき、夕方、背負ってきて、五〇俵もためておく。そして、強石の町へ背負い出し、仲買いの店におろしてくる」。⁽¹⁾

模型的に距離を計ってもらうと、たとえば、原本を伐る地点から炭窯のつくられる窯場までは、おおよそ七メートルから九〇メートル、炭窯から家までは五〇〇メートルから一キロの相当な急な斜面の道、神庭の家から強石までは海拔千ないし千四百メートルの御嶽山の山腹をめぐり、熊倉山を対岸にながめながら、旧道を七曲りして山道六キロのみのり、ということになる。その炭窯から家へ、家から強石までの二ツがセイコによる昔の運びだしの過程だったという。強石へは「朝はやく背負っていった」。⁽¹⁾

道路は今のようによくなかったし、人一人通れるような小さな山道もしばしばで、「昔は車はいれないうところが多かったし、だいたい、釣り橋だった」。⁽¹⁾

強石からの上げ荷は、人からたのまれた食糧や自家用のコメや味噌などだった。⁽¹⁾

昔は「一日のうちにセイコを背負わない日はなかった」。「セイコは必需品で、手から離せなかった」。⁽¹⁾

こうした状態がおいおい変わってくるのは昭和のはじめ頃である。宮平から強石までトロが敷設され、それまで人や馬をつかつての輸送がトロに代替されるようになり、交通事情が大きくかわったという。⁽¹⁾また昭和初年の不景氣対策のひとつとして道路が改修され、戦後は林業が盛んになり林道も山奥まで延長され、橋もコンクリート橋にかけかえ

られた。また、一〇年前には一輪車がいり、ここでもさかんにつかいだされた。こうしてセイコの重みは、ここでも昔とはちがったものになっていった。

武蔵国郡村誌によれば、神庭を含む大滝村（古大滝村）は「地味は黒・赤、植物に適せず」「横峯屏立し、川流縦横平地なし、人家は山腹川峯に散在す、運輸不便を極む、薪炭えい余」といい、物産として、猪八頭・鹿五頭・鈴羊一〇頭・やまめ千尾・蕨八〇石・五倍子二〇貫・きぶし一五貫・桐一五〇方・岩茸二〇貫・材木二千五〇〇本・生糸一〇貫目をあげている。⁽²⁾ 明治以降は村の大部分が国有林で、一〇アール以下の経営が全農家の九一%を占め、一戸当りの経営面積はわずかに四・五アールで、村の人々の多くが国有林関係の山仕事や養蚕・炭焼などによってくらしをたてていたという。⁽³⁾

註

(1) 民宿かにわの加藤強平氏による。秩父の小林茂先生には調べの手びきをしていただき、千島敬次郎先生といっしょに話にはいつていただいた。

(2) 武蔵国郡村誌巻之七（埼玉県立図書館昭和二九年刊）二四五から四八頁。

四、富山のセータ

a つくり

北陸から上信越の山ぞい地帯にかけて、(一)笠木が非常に長く、(二)タテ木とタテ木との間隔が上と下とは著るしく異なり、(三)中の棧から笠木までの距離が比較的短かく、そして(四)大きな点では中型の背負梯子が行われている。この種の背負梯子は石川県立郷土資料館の白山麓白峰村の生活用具のなかにも、富山県の民俗資料調査カードのなかにも

も、高岡市立博物館の資料にも、また、旧民博資料では、富山県中新川郡上市町や新潟県北魚沼郡湯之谷村栃尾又採集のものにみられるので、かつてはそうとう広くゆきわたっていたらしいことが想像できる。

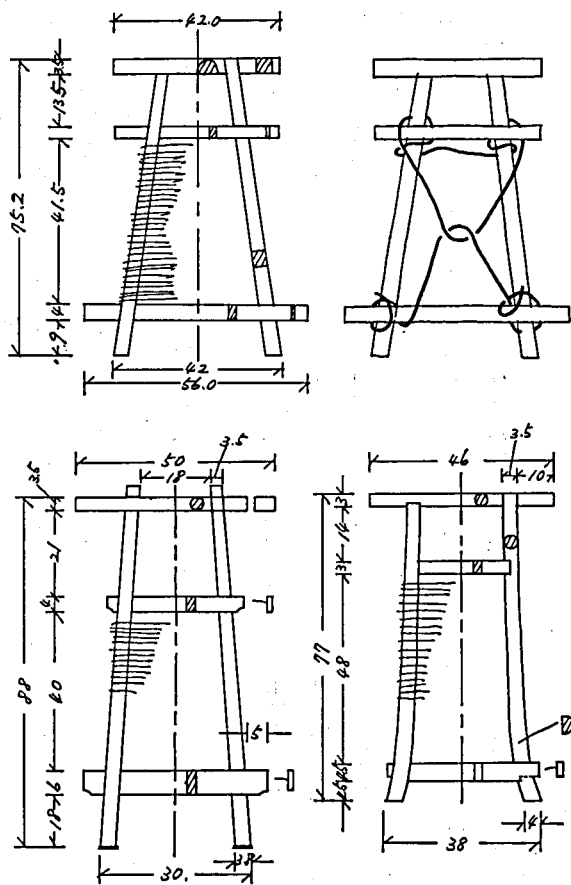
いま、重民の富山県上市町のセータについてその様子を調べてみると、全体の長さは机の高さほど、すなわち七五・五センチで、タテ木の外面そとから外面までの長さは下で四二、上で二〇センチで、中型の背負梯子の部類でもどちらかといえど小型で軽く（重さは一・九キロ）、タテ木の形作る図形は完全に梯形で、上段下段の割合は一对二、全体のヨコタテの比は一对一・八で、また、アシは全長の八分の一、中の棧から笠木までの長さは全長の四分の一にしかすぎないことが確かめられる。

全体の形は笠木型、タテ木には、長さ七六センチ・幅三七ミリの細い角材がつかわれている。タテ木の頭には厚さ一〇ミリ・幅三七ミリのホゾがきつてあり、通しホゾの形で笠木を支えている。

笠木は長さ四二センチでタテ木と同じ太さの角材がつかつてある。これもまた、上市町そのほかのセータのおもしろい点である。笠木のタテ木のあいだにはさまれたところは断面が蒲鉾型で下のほうは平らに削られている。これに対してタテ木の外側は丁寧にまるく断面円型に仕上げられている。

中の棧と下の棧とは幅三五ないし四〇ミリ・厚さ一五ミリで、それぞれ両端には厚さ七ミリのホゾがきつてあり、タテ木に通しホゾで接がれている。このセータでは幅の割りには薄い板が中と下の棧につかつてある。

笠木の両端部分、タテ木から外側の部分の長さは一センチで、両端をあわせると笠木全体の半分にもなる。中の棧の両端の出は八センチ、下の棧の出は九センチで、ホゾの先きは長くつき出ている。その様子は他の地方の背負梯子にくらべてきわめて特徴的で、これは富山セータの形の上での一番大きな特徴といふことができる。ホゾには太さ五ミリのタケの栓（目釘）がさしてある。



第五図 富山県上市町のセータ（上）
 富山県高岡市のセータ（下右）〔高岡市立博物館〕
 石川県白峯山麓のセータ（下左）〔石川県立郷土資料館〕

負い繩は上と下との二つの部分からなっている。上の繩は太さ一五ミリで中の棧と中の棧が挿しこまれているタテ木のところとを取りくむようにして両端をそれぞれとめ、まんなかを撓まして、Uの字型に張ってある。下の繩はそれとは逆に、両端を下の棧に結びつけ、ちょうどI字型にかけてあり、下の繩を上^の繩の輪に通してある。背中のあたるところには（下の棧と中の棧とのあいだには）、太さ三ミリのかたく、縛った丈夫なワラ繩が巻いてある。

高岡市立博物館のセータも、形の上では基本的に上市町のセータとほとんど同じである。しかし、全体の長さは七センチ、笠木の長さは四六センチで上市のよりすこし大きく、タテ木は中の棧から上のほうが断面円形、それから下が蒲鉾型に削られ、アシが左右にやや開いていて、骨ぶとでがっしりしてみえる。ヨコタテの割合はほぼ一対二、高岡のセータもまた中の棧から笠木までの距離はわずか一四センチで、中の棧から下の棧までの三分の一にすぎないことがわかる。アシの長さも四五ミリである。また、高岡のセータでは笠木に太さ三〇ミリの丸木^{まき}がつかわれている。そして、中の棧は上市のセータでは通しホゾの型式でタテ木に接合されていたが、高岡のセータでは含みホゾの形がつかわれている。この形式のほうがむしろ一般的だったと思われる。中の棧と下の棧は幅二三ないし三四ミリ・厚さ二〇ミリである。

笠木の両端の長さは、高岡市のセータでも各一〇センチで、やはり笠木全長の半分を占めている。こうしてみると笠木の両端の出は、単に形の上での飾りではなく、何か実用性をもっているのではないかということが考えられてくる。

負い繩の掛け方は高岡市のセータも上市町のセータもほとんどかわらない。高岡のセータでは、負い繩は太さ一〇ミリの三ツ丸組の繩で、U字型の部分の長さは約七五センチである。荷かけ繩のほうは、左右それぞれの端を下^の棧に結んでとめてある。荷かけ繩は太さ八ミリでやはり三ツ丸組の繩がつかわれている。

高岡市の二上山の麓の地帯では「セータにはなるべく軽い雑木をつかう。原木を山から採ってきて何年も寝かしてかわかしておく。昔は年寄などが割合簡単にこしらえてくれたものだ⁽¹⁾」という。荷かけ繩のことをここではニカズキナワといい「ニカズキナワは寒のうちにさらして強くしておく。セータの繩は汗や雨などでむれてしまい、よく切れるので、毎冬新しいのととりかえた⁽¹⁾」という。

b か ず ぐ

高岡市の二上山麓の地帯では「セータは昔、木炭や薪をかずぐときにつかった、また屋根葺のカヤなど運ぶのにもつかっていた⁽¹⁾」。ここでは薪のことをワリキ（割り木）という。セータはここでは山仕事の用具としてつかわれていた。北陸地方の他の地域のこの種の背負梯子にも同じような使い途が考えられよう。

セータに薪炭をつけるには次のようにする。(1)セータを平らに地上にねかせておく。(2)セータに薪炭をのせ、(3)薪炭に荷かけ繩をかける。荷かけ繩は左右二筋用意しておき、左の繩をタテ木のアシと下の棧とにかけて端を結び、結んだ繩を荷にかけ、(4)笠木の左端のつき出た部分にまわし、また荷にかけ、下の棧にまわし、またまた荷にかけ、笠木の左端にかけるという操作を数度（荷のかけ具合によって）繰り返す。ここで笠木の長くつき出た部分や下の棧の出の部分が意味をもってくるわけである。(5)荷のかけ繩の最後は下の棧の結び目にかがって結んでとめておく。(6)同じようにもういっほうの右側の繩も右側の下の棧から荷・笠木の右端にまわし、同じように結んでとめる。(7)上^{うへ}荷をのせるときには、下の荷にかけた荷かけ繩を笠木から上荷の上^{うへ}にかけ、最後に笠木に結びつけてとめるという。

荷かけの繩を笠木の端にかけるとき、繩を手の指に二度かけて輪を二ツこしらえておき、それに笠木をくぐらせ、撚るみたいにして繩をひいて締める。文章では何とも表わしにくいけれども、この結び方をガメシバリ⁽¹⁾といっている。「ガメシバリで縛ると繩が完全に締ってしまつて簡単には解けない⁽¹⁾」という。

荷をのせたセータを背負うには、荷を積んで平らに地上にねかせておいたセータを、(1)セータに向きあって笠木に手をかけておこし、(2)荷杖のマタのところを笠木の端にはさんで斜めにセータをたてかける。富山のセータでは荷杖はセータと離れがたく結びついている。(3)荷杖のアシは土のやわらかいところにおしつけて、しっかりと固定させておく。(4)こうして、からだの向きをかえ、セータに背をむけるようにして足をのばして地上に坐り、(5)笠木に荷杖をかけていない側からはいるよう、からだを動かしてセータに背中をつけ、(6)負い縄の上の部分に首・肩をいれ、(7)負い縄の下の方の縄(左右二本で下の棧に結びつけてあった)をそれぞれ上の負い縄の輪にくぐらせる。このとき「下の縄を上からいれるようにして、端を外へ出す」ようにして締める。こうすると負い縄は胸の上でびったり決まることになる。(8)上の負い縄におした下の負い縄の両端を結びあわせる。下の負い縄のことを適確にここでは昔からコシナワと呼んでいる。(9)片手で荷杖を笠木からはずし、(10)重心を前のほうにかけるようにして足をひき荷杖をにぎって立ちあがる。

「セータをかずくときには平らなところよりも、坂になった場所のほうがかすぎやすいので、わざわざ坂になった場所を選んでかすく⁽¹⁾」。男の人など、鉄砲をかすぐのと同じように荷杖をいっぽうの肩にのせ、セータをかすくようにしてすこし持ちあげ、重さが直接肩にかからないようにしてかすいていたとい⁽¹⁾う。

セータを背負うときには、ミノゴモというワラの背中当てをつける。長さ約一二五センチ・幅三七センチで、長さ四〇センチ・幅二三センチの首をいれる部分のある立涌編のワラ細工である。ミノゴモは「俵を編むのと同じように、マタボーにかけて編む」。マタボーはウマとか桁とかと同じものらしく、昔は、ミノゴモの下に、女の人ならカスリのモジリにお腰、男の人なら裂き織？のノラギにモモヒキ・ケハン・草鞋ばきといった服装だった⁽¹⁾。

「荷はセータの長さの倍もつける⁽¹⁾。木炭なら下の棧から笠木までのあいだに二俵、その上に上荷として二俵、都合四俵つけるのが普通だったという⁽¹⁾。「男の人なら昔の四貫俵を五俵もつける」。富山のセータでは背負うと笠木はちょうど頭の後のあたりに、下の棧は腰のあたりに当る。

薪なら五束から六束で、一束は長さ六六センチ・周囲六〇センチである。「セータカズギはしめて五六キロ、男で六〇キロ。坂の下で休み、坂の上で休み、途中で休みして二キロぐらいはかずいできた⁽¹⁾」。ミノゴモをつけ負い縄だけで薪炭を背負う運搬法をセータのセータカズギに対してミノゴモカズギというが、「ミノゴモカズギでは木炭なら二俵がせいぜい」で、荷をつける手間はなかったが、そう長い距離は運べない。そこへゆくと、セータは、荷をつけるのに手間どるが「からだに重みがかからないから余計かずぎ、また若いときからかずぎつけているので割合楽だった。ことに遠いみちはセータでかずいだ⁽¹⁾」。

それなら薪炭かずぎは、二上山麓ではどのような意味をもっていたのだろうか。

二上山は高岡市の市街の北三キロほどのところにあり、万葉の昔からうたによまれた場所、月と紅葉の名所として知られていて、現在、鉢伏・城山など二七三メートルの頂をぬって延長七・四キロのドライブコース二上山万葉ラインが設けられている。山頂には仏舍利塔や遊歩道、それに財団法人二上山郷土資料館がある。山頂から富山平野のほぼ半分が望まれるといわれている。

しかし、昔は二上山は山裾の人たちの大切な生活の場だった。薪は家の囲炉裏や風呂にたいたりしたが、それより、薪炭は高岡の町の鋳物工場や窯業や製瓦工場に供給されていた⁽¹⁾。「薪炭づくりは雪のなくなる春先き三月中頃から田仕事の忙しくなる六月までの、田の暇なときの主だった副業だった」。「ワリキはヤマにして家の軒さきに二〇〇束、三〇〇束と積んでおき、高岡の町の仲買の人たちがきて買っていった^(?)」。木炭はマツとアオガシ・クスギ・

シデ・ナラ・クリなどの雑木で、マツ炭は煙るが火力が強いので鑄物や窯業につかわれ、自家用には雪で枝おちした枝や山林のクズをたいていた⁽¹⁾。

セータによる薪炭の背負い出しは、こうして、昔はここでは地域の産業に完全に組みこまれていた。

セータは二上山麓では「ごく最近まで、昭和二七・二八年頃までつかっていた。一般につかわないようになったのは、リヤカーや一輪車がつかいだされてからだし、そして、一般の家庭や工場で燃料にガスや石油をつかうようになり」薪炭の需用が激減したからだという⁽¹⁾。

註

(1) 山本源太郎、長谷川洋阿先生による。山本先生の御家

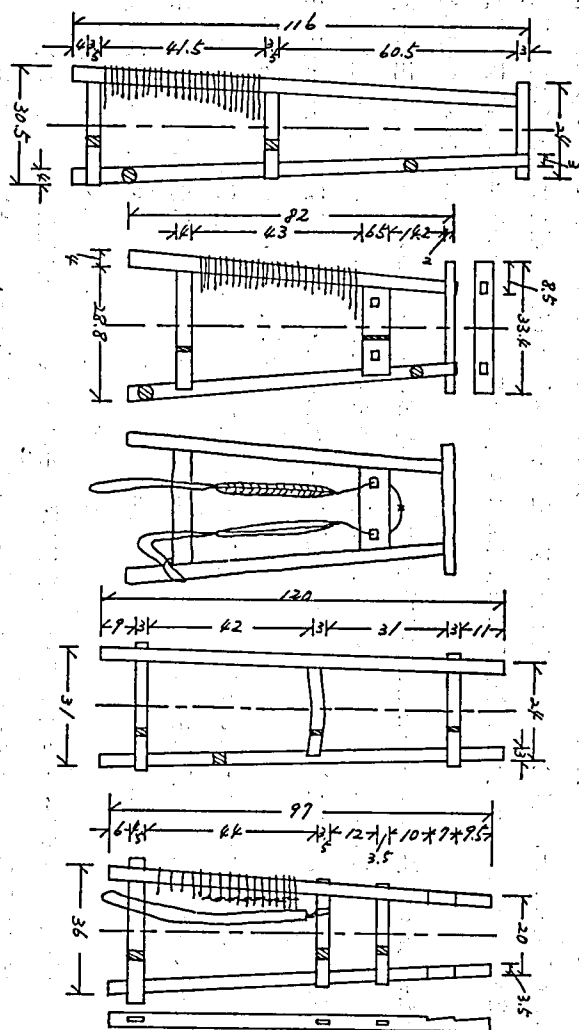
族の方々にもいろいろと教えていただいた。

五、米沢地方のヤセウマ

a つくり

前記のように、新潟県下ではアシの長い大型のヤセウマがつかわれていた。ところが、山形県の米沢地方では(一)アシが短かく、(二)全体の形は極端にタテ長で、(三)中の棧から笠木までの長さが大きな割合をしめ、(四)タテ木に丸木をつかい、(五)大きな点では中型の背負梯子がみられるようになる。これもまたヤセウマと呼ばれている。

こうした米沢型のヤセウマの有様を重民のヤセウマ(ただし所用地は山形県とあるだけでそれ以上は明らかでない)についてみると、全体の長さは一一六センチで、この値だけからみると中型のうちでも長いほうに属し、下の幅は三〇・五センチで、ヨコタテの比は一对四、アシの長さは四〇ミリ程度で、反対に中の棧から笠木までの長さが全体の五三%を占めている。もっともアシの長さや中の棧から上の長さは使い途や使う人のからだつきによって、ここでも



第六図 山形県米沢地方のヤセウマ（左）
 伝山梨郡内地方のショイワク（中左）
 山梨県甲府市城東、滝の沢（右）
 〔山梨県甲府市藤村記念館〕

若干長くなったり短くなったりしている。重さは、軽いスギの木を材料にしているからであらう、二キロとだいぶん軽くなっている。

タテ木は長さ一一六センチ・太さ四〇ないし三〇ミリの丸木で、全体の幅の割りにはタテ木がそれほど細くないから、骨ぶとで丈夫そうな印象を与える。タテ木の頭には幅三〇・厚さ一五ミリのホゾがきざみこまれていて、やはりもとは笠木に通しホゾで接合されていたと思われる。

笠木は長さ二四センチで、かつては太さ三〇ミリ程度のものが使ってあったのだらう。現在の笠木は後補で、古い笠木のかわりに応急的に幅三〇ミリ・厚さ一二ミリの板がいかに無雑作に、タテ木のホゾの片面に釘で打ちつけられている。このように笠木が後で補われたということは、力のかかり方を示していて興味をひかれる。これは荷のつけ方にも関係しているのではなからうか。

中の棧と下の棧には幅三五ミリ・厚さ二五ミリの断面矩形の四角な木が用いられている。両端は厚さ一五ミリのホゾで、両者とも、すくなくとも、このヤセウマでは通しホゾでタテ木に接合されている。

笠木の出はごくすくなく五〇ミリほどである。これまた富山地方のセータなどと比較して、米沢型のヤセウマの一つの特徴と考えられる。

負い縄は幅二五ミリ長さ七五センチ以上で、ワラで平三ツ組に編んであり、ちようどリュックの型式に左右二本、これにはついている。負い縄の上のはじはタテ木の中の棧の上あたりのところに、そして下のはじはアシに編みわけで固定されている。中の棧と下の棧とのあいだには、太さ七ミリのワラの縄が、いっばいに巻いてある。

ところで、功力亀内氏によって戦前にあつめられたこのヤセウマは同じ地方の他の同型のヤセウマとどの程度のへただりがあるのだろうか。ここでは米沢市大字関根の皆川さんのヤセウマについて確かめてみよう。関根は米沢の市街

の南東六キロほどのところにあり、この辺りは米沢盆地もおわって山がかなりせまり、大沢・峠・板谷といった場所をぬけると、やがて道は福島への下りにかかる。

関根のヤセウマは全体の長さ一二〇センチ・下の幅三〇センチで大きき割合とも重民のヤセウマとそれほど違わないことがわかる。形もまた笠木型である。

関根のヤセウマにも太さ三五ミリ前後のスギの丸木がタテ木につかわれている。ただしこの背負梯子では中の棧から上の部分が内側に撓んでいる。

中の棧と下の棧は幅四〇ミリ・厚さ二〇ミリのスギである。中の棧はここでは含みホゾの形でタテ木に接合されている。

そして、関根のヤセウマでは、富山地方のセータとちようど同じように、負い繩は二つの部分からなり、上はタテ木と中の棧とに両端をかがつとめ、U字型に張っており、コシナワにあたる下の緒はタテ木のアシにとりつけられていて、下の緒は一度上の繩の輪のなかを通してから結ぶように工夫されている。

関根のヤセウマでは棧や笠木はスギだったが、本当はクリがよいのだという⁽¹⁾。また「ヤセウマの形はだいたい同じでも、寸法は人のからだにあわせたり、使い途によったりして、ややまちまちだ⁽¹⁾」という。ここにあげたヤセウマは関根附近ではだいたい標準の大きさという。

関根では荷かけ繩をシメヒモといい、シメヒモには普通太さ一〇ミリのロープがつかわれている。荷杖はここでも必需品で、太さ三〇ミリぐらいの自然のままの枝ぶりのよい木をとってきて、「ヤセウマを背負ってみて長さをきめる⁽¹⁾」。荷杖をニカケボーとよんでいる。

b せ お う

関根では「ヤセウマは薪炭や豆稈、牛馬の飼料としてのホシクサ、米作農家では刈りとった稲束を運ぶのにつかわれた」。「五色温泉が近いので、温泉の荷をかつぎあげるのにもつかった」、「一般的にいえばカサバルもの・重いものをつけ、一家に働き手が五人いればヤセウマも五ツ用意してあった」⁽¹⁾。

ヤセウマに薪炭をつけるには関根では次のようにするという。(1)まず荷杖の頭のマタになったところをヤセウマの笠木や中の棧にかつて、ヤセウマを斜めにたてかける。(2)上から荷を重ねてならべてヤセウマにおき、(3)荷かけ縄をかけてゆく。縄は二本用意し、右のタテ木のアシに一本の縄のはじを結びつけ、(4)結びつけた縄を荷の上にまわし、(5)笠木の右端に「上から下へ」まわしてひとまず結ぶ。(6)同じように左側の荷かけ縄も荷がかがって笠木の左端に結びつける。(7)上荷に俵ならば一俵か二俵のせ、(8)荷かけ縄でかがり、(9)最後は上の荷をかがった最前の縄に結びつけてとめる。

荷をつけたヤセウマを背負うときには、ヤセウマに向きあい、(1)荷杖で斜めに支えられているヤセウマを、たとえば左手でタテ木の笠木の下あたりをもち、(2)右手を負い縄にかけ、負い縄の上のほうの縄をもちあげ、(3)からだをねじってヤセウマに背中をむけ、ヒザを折って中腰の姿勢でヤセウマにからだをつけ、(5)上の負い縄に首・肩をいれ、両側の下の負い縄を「内から外へ抜くようにして」上の負い縄のあいだに通し、(7)下の負い縄を締め、そして結びあわせ、(8)腰をあげて「頭のほうへ力をいれるようにして立ちあがる」⁽¹⁾。

ヤセウマを背負うときには、ショイミノをつける。ショイミノは「雨簑とちがつて、オッカワやマダの皮・ママダの皮をワラのあいだに編みこんで肩のところなど切れないようににした幅のせまい簑で、からだには、木棉の短い仕事着にタツツケをはき、寒いときには綿入れのドンブクを着こんだ」⁽¹⁾。

ヤセウマは「バランスが大事で、非常に技術的なものだ、力が腰と肩と背に均等にかかるように荷をつけないければ

ならない。上荷はそのためにもつ[↑]ける。「上荷はへたにつけるなら、つけないほうがよっぽどいい。荷を上につけすぎると肩だけに力がかかり、下につけすぎると腰だけに重みがかかって背負いにくい[↑]」という。

c は こ ぶ

ヤセウマでは、炭俵なら下の棧から笠木までのあいだに順に五俵つけ、その上に上荷として一俵ないし二俵のせるという。薪なら長さ約六〇センチにきり、胴まわり結び目とも九六センチ余の縄で束ね、乾いた薪なら下に五束から六束、上荷として二束か三束、人によっては約七五キロも運ぶという。

薪は、この地方では飯焚き、風呂焚き、ストーブの燃料などにかかせなかった。

薪は「クリやナラの間伐したものをつかう。山が急なので伐採した木を一本のまま落し、平らな場所へおろしてきて約六〇センチの長さにきり、一〇束ぐらいずつ積みあげて二カ月間干しておく。伐採は春雪のすくなくなる四月から五月にかけてなので、搬出するのは五月から六月初旬にかけて、ちょうど田仕事が忙しくなる前である[↑]」。「薪は一年に四棚から五棚用意しておく。一棚は薪を幅・高さとも一六五センチに積みあげた量である」。山のなかの平らな場所の薪の集積点の土場^{どば}から家までは三・三キロないし四・四キロもある。そのあいだを一回休むぐらいで、一月に一〇往復もしてヤセウマで背負い出すのである[↑]。「休む場所にはたいがい寄りかかったままで腰をあてて休めるくらい[↑]の石などがあり、また、荷杖をあてがってヤセウマを背負ったまま立ったまま息抜きする」。しかし「これだけの長丁場だとニナワ（荷縄）で背負い出すよりもヤセウマのほうがはるかに有利だ[↑]」という。山道はいまのように車がいれなかったから、ヤセウマによる運搬はほとんどたった一ツの薪炭の有利な運搬法だったわけである。それならお米の取りいれにおけるヤセウマの役割はどうであろうか。そこでもヤセウマ運搬は薪炭の場合と同じようにかけがえのないものだった。

刈りとった稲は、今ではその場で稲木にかけて干し、耕耘機で運んだり、コンバインで処理されるが、昔は別の場所ではサガケし、東のまま家々の納屋へ運びこみ、冬事に脱穀した。

刈りとった稲は、(1)三つかみで一把に束ね、(2)ニナワで背負ってハセまで運んでゆく。(3)ハセに運んだ稲束はまんなから分けて穂を下のようにしてハセの棒にかけ、(4)天候にもよるが一日から二日も干しておく。(5)干した稲束は六把ずつ一ツに束ね、たがいちがい、ヤセウマにつけ、(6)四束二四把約七五キロぐらいつけて家まで運び、(7)納屋にいれ、(8)穂のほうを内側にして円筒型に積みあげる。(9)冬期、それを女の人たちが千歯や足踏で脱穀し、摺臼にかけ(男の人たちは冬は皆山仕事に出してしまうのでこの過程は女の人たちの仕事だった)、(10)出荷のとき俵にいれて出す。ハセはなるべく田の近くにつくるが、原野のようなところに設けるので、田からハセまでは、たとえば遠いところで五〇〇から六〇〇メートル、「刈りたての稲の穂は乾いた穂よりも三倍も重いので、力のある人で一〇把ぐらいしか運べない。ニナワは長さ三メートルほどで、ショイミノをつける」という。そして、ハセから家までは、一キロから一・五キロの見当である。「ハセから家までは、ほとんど休まずにヤセウマで一氣に運んでしまう。ニナワではいくらか背負えないし、たとえ背負ったとしても、いいところヤセウマの半分しか一度に運べない。それに稲ワラがくいこんで腰がいたい。だからヤセウマをつかう」⁽¹⁾しかなかったのだという。もちろん、耕地整理が行われ、農道が広がり、車が奥まったところまではいっていきけるようになったのは戦後のことである。⁽²⁾

ここでも、ヤセウマがつかわれなくなったのは一〇年ほど前からのことだという。

関根を含む旧山上村の昭和二十九年の統計によれば、人口は約五千で、稼働人口の五一・五%が農業で、ほかに六・九%の林業、七・五%の鉱業、一〇・八%の運輸業があり、村の主要な生産物は三五〇〇石のコメ、二二万二千貫の本炭、六千石の木材、マユ・タバコなどだったが、本炭と木材は村内の需用をみたすにもたりない量だったという。⁽²⁾

そこからはかういふ、コメを軸にしそれに養蚕や林業や運輸などの賃仕事にたよらねばならない一ツの山村の姿がかんでくる。しかも、ここの稲作は、県下でも有数の山間積雪寒冷地帯の稲作で、夏は雨が多く日照時間はごくすくなく、また、湿田が多く(吾妻山麓の湿田階段地が非常に多い)土壌は強い酸性で作柄はつねに不安定だったといふ。雪は例年二月中旬に二メートル近く積り、一月七メートル、三月まで五メートル以上積ったまま。耕地のうち田は一九五町、畑は一七七町だったが、畑はほとんど豆類を中心とした雑穀農業らしい数字がみえる。このような所で関根のヤセウマはつかわれていたわけである。

註

(1) 皆川甚吉、高橋忠雄、伊藤三之助諸先生による。

(2) やまかみ(昭和二十九年山上村広報委員会刊)一六七頁

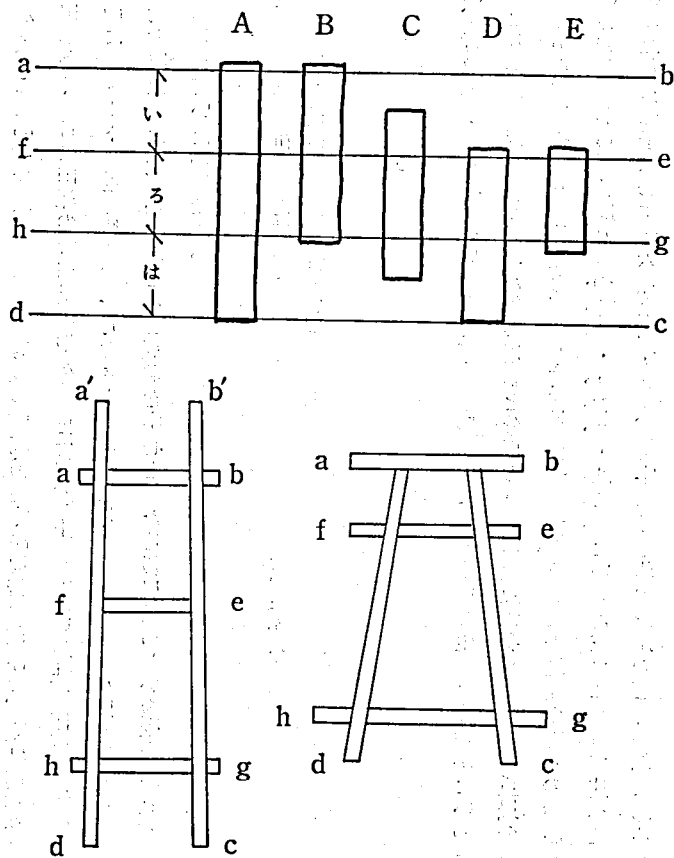
そのほかによる。

あとがき

以上小文では、背負梯子の各地域地域のさまざまな形が何にもとずいて生まれるのかといった誰しもがいだく疑問から出発して、とりあえず仮りに分析のための用語と分析のための重点六項目をきめ、重民の背負梯子のうちのいくつかを素材にしながら、形や作りの特徴と、そして背負梯子をつかう面での地元の方々のお話をできるだけ正しくお伝えすることに努力しながら、各節ともつくり・せおう・はこぶといった三ツにわけて述べてみた。

ここでとりあげた背負梯子はわずか六点左右にすぎず、文字通り全体のほんのごく一部であるが、改めて、印象にのこった点をまとめてみよう。

一、背負梯子は大きな形の点から三ツの型にわけられる。説明の角度をかえていえば、背負梯子を上の方から中の



第七図 背負梯子の型

棧まで、中の棧から下の棧まで、下の棧から下のアシの部分の三ツからなりたつとすると、そして、三ツの部分を「いろは」とすれば、(一)「いろは」すべてを含む、(二)「いろ」の二ツからなる、(三)「ろ」を中心に、「い」と「は」の両方をすこしずつ含む、(四)「ろは」の二ツを含む、(五)「ろ」だけからなるの五ツの型がありうる。これを順にA B C D E型としよう。このうちDは、ここでは取りあげなかったし、もしあれば珍しい形だといえよう。これまでのわけ方ではAが大型、B Cが中型、Eが小型、Aは児玉町や横越村の背負梯子の型、Bは米沢のヤセウマ型、Cは富山上市町や高岡市のセータ、秩父大滝村のセイコの型、Eは後出の能登名舟のセナガチということになる。

二、この五ツの型と負い縄・荷かけ縄のかけ方とはどう対応しただろうか。いま背負梯子にa b c dの四角な枠を、はめ、枠をとりしきる二本の棧のはしをe f、g hとすれば、負い縄にはリニックのように「f * h、e * g」のもと、ショイ・クビというのだろうか、または何処かで誰かがいていたように越後背負いというのだろうか、「e * f、h * (e f) g * (e、f)」の二ツの型がみられる。ただし*は結ぶし、しを示す。そして、Aの児玉やCの大滝、Eの名舟は前の型、Aの横越・Cの富山のセータ、Bの米沢関根のヤセウマは後の型であった。これは、地域によって、たとえば荷縄のいよい方のくせが背負梯子の方にうつたと考えてよいと思われる。

三、いっぽう荷かけ縄は、左右二本の縄を平行に、「d * a、c * h」にして荷をおさえる型と、二ツの縄を用意し、「d * c、(d * c) * (a bの midpoint) * (d * c)、* c」とかけてゆき、それで荷をおさえる型とがみられ、A型の児玉と横越の背負梯子は後の型、米沢や富山や大滝のB C型にはいずれも前の型のかけ方がみられた。こう考えてくると、「笠木をもつ大型の(A型)の背負梯子*稲束ムギ束などの運び出し*後の型の荷かけ縄のかけ方」という結びつきが自ずと浮んでくる。なお、富山地方のセータの長くつきでた笠木や下の棧のはじは、「d * a、c * b」をn回くりかえすための工夫で、それはそれで実際性をもっていた……ことになる。

表1 こことりあげた背負梯子一覧

内 訳 よび名	所 用 地	長 さ cm	中に対する長さの 倍率		型 式	負い繩	荷かけ繩	使 い 途 な ど
			5	倍				
1. シヨイタ	埼玉県児玉郡児玉町	203.7		7.1	笠木A型	リュック型	逆Y字型	ムギ刈り、桑運び、薪炭運び、直刈り（とくに埼玉県北部の畑作、山仕事）
2. ヤセウツ	新潟県中蒲原郡越前村	146.0	4.3	4.5	笠木A型	胸むすび前び	逆Y字型	イネ刈り、ムギ刈り、カヤ運びなど（新潟平野の米作り）
3. セイコ	埼玉県秩父郡大滝村	107.5	3.5	2.3	梯子C型	リュック型	II字型	薪炭運びなど（奥秩父の山仕事）
4. セータ	富山県富岡市城光寺	77.0	2.0	?	笠木C型	胸むすび前び	II字型	薪炭運びなど（二上山麓の薪炭作り）
5. ヤセウツ	山形県米沢市関根	116.0	3.7	2.0	笠木B型	胸むすび前び	II字型	薪炭運び、イネ刈り（君夷山麓の田作り・山仕事）
6. セナガチ	石川県輪島市名舟	63.0	2.3	1.4	梯子E型	リュック型		
7. カルイ	鹿児島県十島村竹島	120.0	2.8	3.4	梯子C型	リュック型	?	?
8. シヨイタ	山梨県（郡内地方）	82.0	2.8	2.1	笠木C型	リュック型	?	?

四、B、C型の背負梯子では、荷を背負梯子につけるときにも、荷をつけた背負梯子を背負うときにも、背負梯子を背負って歩くときにも、背負ったまま休むときにも、荷杖がかかせなかった。荷杖は背負梯子の一部のようなものだった。

五、背負梯子が一般に生産の場から姿を消したのは、わずかこの一〇年のことである。昔のように、田仕事や畑仕事・山仕事の場合までの道が、人やつと一人通れるくらいで、車がいれない奥まったところにあるときには、背負梯子によるし、よい出しが、荷縄などをつかつてのか、つぎ出しにくらべ、多くのところで、いっそう効率のよい運び方だったといえよう。それが、耕地整理や林道の改修がすみ、よい道がつき、奥まで車がいれるようになり、リヤカーや自動耕耘機や一輪車はいり、田や畑の作り方もかわると、この人の力だけにたよる体力のいる運搬方法は次第にすたれていく。そして、山では燃料の変化が直接薪炭の生産に大きな影響をあたえた。こうした過程をみるにつけ、この一〇年以來の変わりかたが、どのような意味をもつものなのか、変っていかざるをえなかった過去の暮らしとは、どのような土台のうえになりたっていたのかを思わずにはいられない。

六、これまで背負梯子は「平地では大きく山へはいるにしたがって短くなる」といわれてきた。たしかにそうした様子はどこにでもみられるし、事実、A型の背負梯子は山では動きがとれそうにない。しかし、私たちは用具の形をいちがいに地形やそのほかの自然の条件のセイにしてしまっただけとはいえないことを知っているし、もし用具と自然とがほどよく対応していたとしても、そこに人の営みを一枚も二枚もいれて、分析していかねばならないことを学んでいる。もしそうだとすれば、背負梯子とそれにまつわる仕事の有様を具体的に掘りさげてみることによって、各地域での生産のなりたちや、ことに近世末からつい最近までの生産の発達や、生産の暮らしへの働きかけをよみとるための素材が、そこからえられることは疑いない。

民俗資料は、これまで漠然と古い時代の庶民の暮らしを解く手がかりと考えられてきた。しかし、たとえばそれが古代や中世の人々の暮らしに結びつくのが不可能でなかったにしても、民俗資料は、より直接的には、近代現代の人々の暮らしの移りゆきを示す素材として、まず重視してよいのではないかと思われる。

こうした認識にたてば、郷土館・資料館・博物館における民俗資料のあつめ方、ならべ方、飾り方にも、県市町村誌史におけるいわゆる民具資料の利用のしかたについても、新鮮な方向がひらけてくるのではなからうか。

付

一、重民の背負梯子のうち、ここにとりあげなかったものがなお四ツある。一ツは磯貝勇先生が山形県東田川郡広野村で採集してこられたもので記録には改良背負梯子とある。この背負梯子は大きさの点からいえば大型で、荷をのせる台がつくりつけにされていて、そこに荷かけ縄などががる釘金の装置がつけてある。何故このような背負梯子を考え出したか、どのようないどぐちで改良を思いついたか、改良の結果はどのようなものだったか、そのほかを、現在のうちに書きとめておいてほしいものだと思う。

二、もう一ツは鹿児島県十島村竹島のカルイである。これはいわゆる有爪A型の背負梯子の典型としてしばしば引きあいにだされるし、私も触れたことがある。(一)長さは中型で、ここでのB型に近く、(二)アシはかなり長く、(三)タテ木に幅の広い木がつかわれていて、(四)全体の形は梯形で、(五)中の棧と下の棧とのあいだにもう一本、背中当てを受けるための棧があり、(六)自由に脱着できる長い木の爪が紐でとめてあり、(七)背中が当たるところには脱着できる背中当てがあり、(八)ワラの平三ツ組の負い縄が左右二本、中の棧に紐でとめてある。こうした特徴のいくつかは瀬戸内の背負梯子にも共通しているようである。九州の有爪型の背負梯子については、小野重朗先生の注目すべき御指摘がある⁽¹⁾。小野先生は南九州の爪のない背負梯子と有爪型の背負梯子とを比べあわせ、有爪型の背負梯子が炭焼と関係があるのではないかと指摘しておられる。⁽¹⁾西日本の有爪型の背負梯子についても、ここで問題にしたような詳しい様子が明らかにされればと思われる。

三、のこりの一ツは功力亀内氏が、昔、山梨県の郡内地方であつてこられたものだという。(一)大きき中型で、(二)全体の形は笠木をおいた型、(三)ヨコタテの割合は一对三でタテ木のアンは相当開いている。(四)タテ木は太さ四〇ミリの丸木で、頭には幅三〇・厚さ二〇ミリのホゾがきつてある。(五)アンは一三センチで全長の一六%ほどである。(六)中の棧から上の棧(笠木)までの長さは全体の長さの二割で決して長くない。これがこの背負梯子の一ツの特徴といえよう。(七)笠木は長さ三三・四センチ、幅五〇ミリ・厚さ二〇ミリの板で、まんなかに縄ずれの跡がみられる。(八)中の棧は幅六五ミリ・厚さ一〇ミリの板で負い縄をかける穴が穿たれている。このような負い縄のつけ方は功力氏があつてこられた茨城県太子町の背負梯子にも、信州諏訪地方の背負梯子にもみられる。(九)下の棧も幅四〇ミリ・厚さ一〇ミリで、中の棧と同じように下の棧も含みホゾの形でタテ木に接合されている。これも珍らしい点である。(十)負い縄は長さ二〇〇センチ一筋で、肩の当るところには二ツ芯の組み編みがみられる。材料はシュロである。負い緒の先きはタテ木から取りはずせるよう輪がつくられている。問題なのはこの背負梯子の所用地で、山梨県でも甲府附近のものではないというし、桂川上流域の郡内地方でも、大月や上野原ではみられないようである。つくりからみて、個性が強く、どのようにして使われたのか、つきつめてみる機会があればと考ていえる。

四、背負梯子のなかには数は必ずしも多くはないが、ごく小さな背負梯子が含まれている。この小さな背負梯子は、(一)たんに全体の長さが短かく、(二)ヨコタテの値がそれだけ近接しているだけでなく、(三)棧の数も上下二本で、(四)全体的にみて厚みがあるなどの特徴がある。この級の背負梯子になると、もちろん祖先代々その形が伝えられてきたものもあるのだろうが、何かの必要にせまられて、中型の背負梯子の作りを応用して、独立発生的につくりだされた場合もあったらしい。能登名舟のセナガチは、全体の長さが六三センチ、幅は二八センチで上下ともほとんどかわらない。ヨコタテの割合は一对二・二五で、タテはそう長くはない。中の棧から上の長さは一七センチで全体の長さ

ている。全体の長さは五七・五センチ、幅は二九センチで、スギの丸太をタテ二ツに割り、それに幅三〇、厚さ一〇ミリの二本の棧をかけたもので、アシは一〇センチで上の棧から上はごく短い。この小さなショイタは横須賀市鴨居の青木さんが、山ひとつこえた浦賀湊の親戚の家まで自家製の味噌をとどけるのに作ったショイタで「味噌は一斗樽にいれてゆき、帰りはじやまにならないよう、小さいのをとくに工夫してこしらえた」、「とにかく手にさげるよりは、ずっと楽だった」、「炭なら一俵背負えた」、「サツマや野菜運びなどにもつかった」という。浦賀への山みちは五〇分で、「ほとんど休みなしで歩きとおした」⁽³⁾。この浦賀の例は、ひよっとしたら、名舟のセナガチにも役だったのではないかと思ってみる。

註

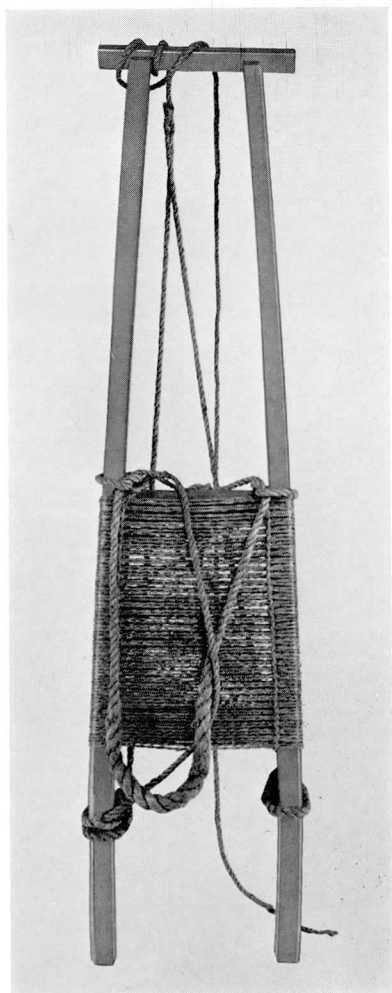
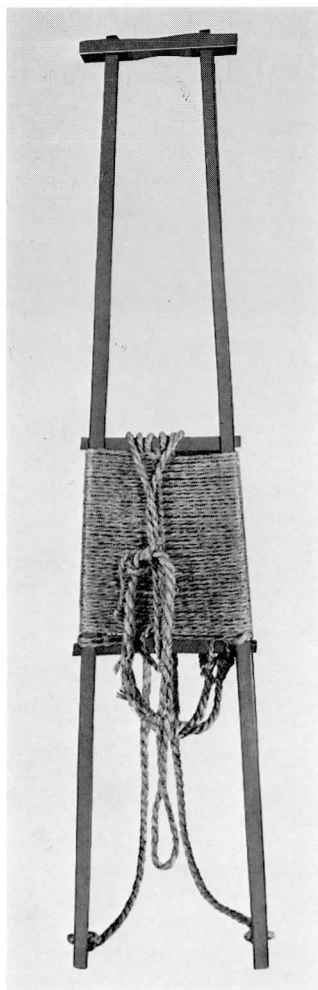
(1) 小野重朗先生、南九州の民具(昭和四〇年慶友社刊)

二四四から四五頁。小野先生によれば鹿児島県曾根郡志布志町では有爪と無爪の二ツのカリコがつかわれていて、有爪はオトコカリといい、男の人がつかい、「腰当はワラの円形のヘワを吊るす」、そして、爪があり「ハシゴ状の木は角にけずってあり、反っている」、また荷杖をつかい山地に広く分布していて製炭業者から伝えられたという伝承をもつ。これに対して、無爪のカリコはオナゴカリといい爪がなく「腰当はワラ・シュロの縄をぎっしりと巻く」「ハシゴ状の木は自然のまゝで直線」で、荷杖はつかわず、「限られた地方、平地の地方に分布し

て製炭とは関係がない」といい女の人がつかうという(同書二四五頁)。ここでは有爪と無爪のカリコがはつきりとわかれている。先生によれば「有爪のカリコは宮崎・熊本の山地から薩摩・大隅一帯の山地に広いが、無爪のカリコは、桜島を中心に大隅半島の周辺一帯、甕島・種子島などが主な分布地であって、他ではほとんど見ることはできない」(同書同頁)という。

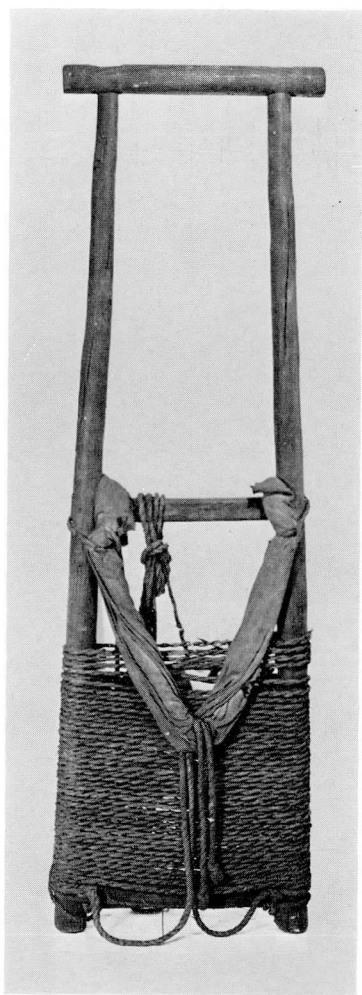
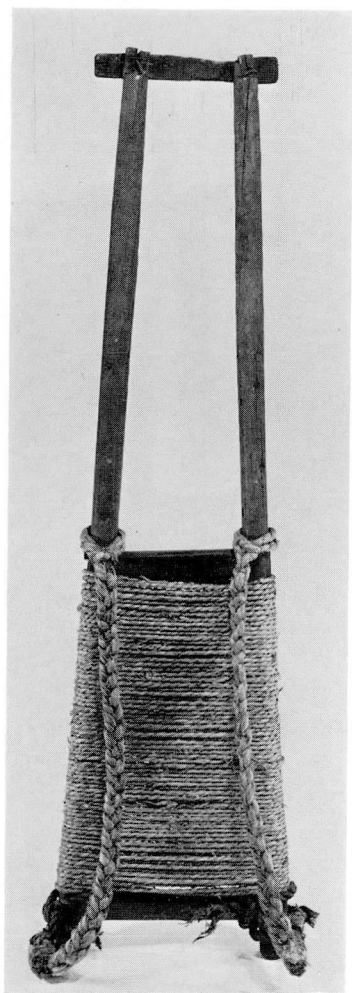
(2) 小沢秀之先生、大月市教育委員会の諸先生による。春になれば富士山麓でもさがしてみようかと思っている。

(3) 横須賀市立博物館の田辺悟さんによる。



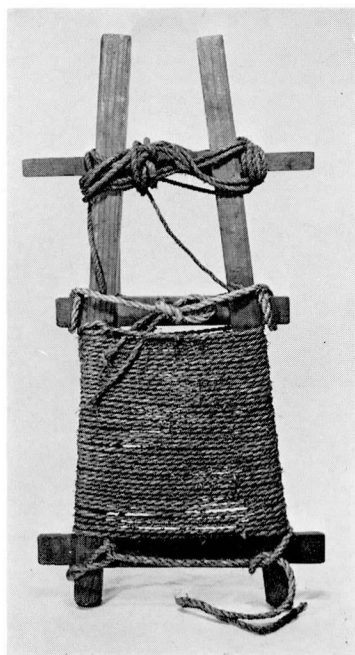
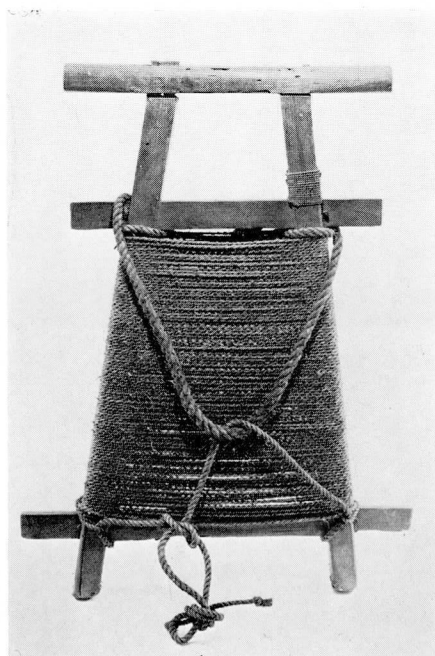
埼玉県児玉郡児玉町金屋のショイタ (左)

新潟県中蒲原郡横越村のヤセウマ (右)



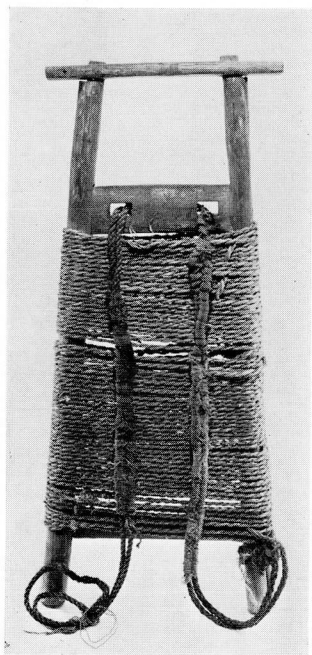
伝山形県のヤセウマ (左)

山形県米沢市のヤセウマ (右)



富山県中新川郡上市町のセータ（左）

富山県中新川郡上市町のシヨリコ（右）



伝山梨県郡内地方のショイワク (左)

石川県鳳至郡南志見村名舟のセナガチ (右)

